Tohto University

# Changes in the perception of staff caused by standardized continuous practice of intergenerational exchange programs in complex facilities for children and older adults: Interviewing staff one-and-two years after the initial training



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-06-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 種市, ひろみ, 六角, 僚子, 関, 由香里, 林, 幸子, ROKKAKU, Ryoko, SEKI, Yukari, HAYASH, Sachiko<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.50818/00000105 |

東都大学2022

【研究報告】

# 継続的世代間交流プログラムを介入とした幼老共生型施設職員の世代間交流に対する認識の変化
## ― 介入１年後，介入２年後のインタビューより ―

Changes in the perception of staff caused by standardized continuous practice of intergenerational exchange programs in complex facilities for children and older adults: Interviewing staff one-and-two years after the initial training

種市　ひろみ　　六角　僚子　　関　由香里　　林　幸子
Hiromi TANEICHI　Ryoko ROKKAKU　Yukari SEKI　Sachiko HAYASHI

要　旨

本研究は，特別養護老人ホームと保育園が隣接する幼老共生型施設の職員の世代間交流に対する認識の変化を明らかにすることを目的とした，介入研究である．世代間交流プログラム研修および継続的支援を介入とし，介入1年後，介入2年後にフォーカス・グループ・インタビューを実施した．施設職員は，交流がもたらす高齢者や子どもへの良い効果を実感することによって，交流は義務感を伴う形式的であるという認識から，交流の本来の目的に根差したより自由な交流を工夫したいという認識に変化していったことが明らかとなった．また，ホームの職員と保育士にとって，高齢者・子どもを理解するための講義・DVD視聴は必要な研修であり，話し合いの場を設ける，研究者から助言するといった継続的支援は，主体的に交流に関わるという認識の変化をもたらしたことが示唆された．２年間の介入後も，職員間の協働が難しいと認識され，その対処が今後の課題であった．

キーワード：世代間交流プログラム，幼老共生型施設，フォーカス・グループ・インタビュー，職員，認識

## Ⅰ．はじめに

わが国では1994年に示された「21世紀福祉ビジョン」[1]において，世代間交流の必要性が強調され，いくつかの自治体や団体で世代間交流の事業が行われている．さらに，2015年に厚生労働省が示した「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現―新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン―」[2]では，支え合いが推進され，その具体的方策として「世代間交流」が挙げられた．しかし，高齢化の進む中，2019年国民生活基礎調査によると[3]，65歳以上の者のいる世帯は全世帯の49.4％を占め，そのうち夫婦のみの世帯が最も多く約３割，単独世帯と合わせると６割近くなり，日常的に子どもと高齢者が触れ合う機会は限られ，さらに認知症高齢者と子どもが接する機会は極めて限定されていると考える．

世代間交流は，1960年代半ば世代間断絶が著しかったアメリカにおいて，その必要性が指摘され，各地でIntergenerational Program（以下，世代間交流プログラムとする）が登場したのがその起源である[4]．また，世代間交流プログラムは，世代と世代をつなぐという意味がある．例えば，高齢者と幼児のように，離れた世代同士の交流を意図的かつ継続的にプログラムを実施するという特徴がある[5]．草野[6]は，世代間交流を“子ども，青年，中年世代・高齢者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って，自分自身の向上と，自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動で，一人ひとりが活動の主役になること”と定義しており，世代間交流プログラムが展開される範囲は，対象とする年齢層や，健康・福祉・学校教育・社会教育分野などと幅広く，その場の特性に応じた様々なプログラムが展開されている[7]．

東都大学 幕張ヒューマンケア学部 看護学科
E-mail：hiromi.taneichi@tohto.ac.jp

日本の世代間交流は，1960年代後半から多くは単発的なイベント・行事として始められ[8]，1980年代以降，意図的・継続的に世代間交流を実施するための仕掛けとして「幼老複合施設」における「幼老統合ケア」が実践されるようになった[9-13]．幼老統合ケアとは，高齢者ケアと乳幼児保育を融合・連携させ，子ども世代，高齢者世代への「教育的効果」，「生きがい効果」，福祉施設にとっての「空間的効果」，「財政的効果」を目指すもので[14]，ケアには交流のためのプログラムが含まれている．しかしながら，空間的効果や財政的効果のみが重視され，プログラムを実施せず，教育的効果や生きがい効果があらわれない施設も多く見られた[4]．また，幼老複合施設などにおいて，たとえば保育士と介護福祉士といった複数の資格所持者が働くことで人材不足を補うことができることから，世代間交流が，本来の目的ではなく介護やケアにおける人材不足の解消のために「使われてしまう」ことが懸念されている[4]．高齢者や子どもにとって効果的な世代間交流は，単に高齢者と子どもの施設が複合しているだけでは実現できず，世代間交流に関わる人々が，子どもたちと高齢者が出会い，互いに豊かな関係を持てるような「幼老共生」[15]の重要性，世代間交流の意義，効果を理解し実行するといった認識を深める必要があると考える．

世代間交流が良い効果をもたらすことは明らかではあるが，交流の推進を妨げる要因があり，その一つが人材育成の難しさである．「幼児と高齢者とが出会う世代間交流プログラムの推進においては，幼児のみならず，高齢者の特性をも把握できた保育者の指導性が大きく影響する」[8]との報告があることや，世代間交流事業を企画・運営する上での職員の負担[16]が挙げられており，職員の育成・職員への支援は重要な課題である．一方，職員が世代間交流プログラム研修を受講し，継続的に支援されることによって，高齢者と職員双方にプラスの影響を与えることが示唆され[17]，職員への効果的・教育的支援があれば，質の高い世代間交流の継続的実践につながると考える．しかし，世代間交流の継続性について検討している研究はわずかであり[18]，今後，世代間交流の非日常化から日常化への発達過程の探求が期待されている[19]．

交流の日常化つまり継続には，世代間交流に関わる人々の理解と実践力が必要である．すでに，交流の企画・運営に負担を感じやすいことが明らかとなっているが[16]，継続的に交流実践する過程でどのようなことを感じ，考えたのか，それらを明らかにした研究は見いだせなかった．世代間交流に関わる人々の認識やその変化を知ることは，支援を考える際に重要な資料となる．そこで，本研究では，幼老共生型施設（特別養護老人ホーム，保育園）の職員に焦点を当て，標準化した世代間交流プログラム研修および継続的支援[8]を介入として，研修終了１年後および２年後（以下，介入１年後，介入２年後とする）の職員の世代間交流に対する認識の変化を明らかにすることを目的とした．

＜用語の定義＞

本研究では，「認識」をある物事を知り，その本質・意義などを理解すること．また，本質や意義を理解するために感じる，考えるといった心の働きと定義する．また，「幼老共生施設」とは，子どもたちと高齢者が出会い，互いに豊かな関係を持てるような生活を目指す施設を指す．

## Ⅱ．研究方法

### １．研究対象

#### １）対象施設

Ａ市に所在する，研究参加への同意が得られた幼老共生施設とした．研究開始前は月２～３回程度，子どもたちがホームを訪ね歌や踊りを披露して世代間交流を行っていた．敷地内に特別養護老人ホームと保育園が配置され，２施設間の移動が可能である．定員はそれぞれ50名，90名である．また，保育園児は０歳から５歳児であった．同敷地内には，介護老人福祉施設，介護老人保健施設，デイサービス，学童保育施設，福祉系専門学校など多様な施設があり，地域共生社会の実現を目指した，複合的な福祉コミュニティを形成している．

#### ２）研究対象者

幼老共生施設に所属する職員のうち，標準化した継続的世代間交流プログラム[8]を受けたことを要件とした．各施設の管理者の紹介を得た上で，要件を満たす職員に対し研究概要及び倫理的配慮について説明し，口頭及び文書による研究参加の同意が得られた職員を対象とした．

### ２．研究デザイン

施設職員に対する標準化した継続的世代間交流プログラムによる介入研究である．

### 3．データ収集

同意の得られた対象者11名を1つのグループとして，インタビューリストに従いフォーカス・グループ・インタビューを実施した．インタビューは対象者を変えずに，介入1年後，介入2年後の2時点，各1回，約1時間実施した．1名の研究者はインタビュアー，もう1名の研究者はインタビュー時の対象者の表情やしぐさ，その場の様子について観察記録を行った．インタビューリストの内容は，世代間交流に関する高齢者，子ども，職員の様子や変化，世代間交流プログラムについてどのように感じ，考えるかであった．インタビューは，他者が入室しないようにアナウンスした上で，施設内会議室にて行った．インタビュー前に録音する旨を対象者に伝え，インタビュー内容は了解を得た上でICレコーダーにて録音した．また，インタビュー前に，性別，年齢，現職経験年数について情報を得た．

### 4．研究期間

研究に関する説明，準備等は2015年6月より9月，介入は2015年10月より開始し，2017年10月まで実施した．データ収集は，介入1年後2016年10月と2年後2017年10月に行った．

### 5．介入方法

標準化した継続的世代間交流プログラムは，研修と継続的支援からなる．研修は，世代間交流プログラムや高齢者・子どもの特徴・関わり方の具体的な技術や注意点について実践例を紹介しながら伝える講義の受講及びDVD視聴によって構成され，4回シリーズであり，幼老共生型施設の職員全員に対して行った．研修1回当たりの所要時間は約30分間であり，4回実施した．研究者による継続的支援として，研修終了後各施設において2か月ごとに定期検討会を実施し，交流の場で実践されるプログラム（以下，プログラムとする）に関する報告・討議，研究者による疑問への回答及び助言が行われ，1年間で5回，2年間で合計10回実施した．両施設が参加し，意見交換する全体会議は，6か月ごとに1回，合計3回実施した．対象者と研究者の相互のサポート体制を調整する場でもあり，参加者の約8割は高齢者施設の職員であった．高齢者と子どもの交流は，週1回定期的に保育士2名と子どもたちがホームまで移動し，歌や踊り以外に手遊びやボーリング，楽器演奏など，高齢者と子どもが関われるプログラムが実施された．

### 6．データ分析方法

インタビュー後，録音された内容をもとに逐語録を作成した．逐語録から高齢者，子ども，職員，プログラムへの認識を抽出し，意味を損なわないようにコード化した．コードの意味内容を繰り返し熟読後，類似性，共通性に従ってサブカテゴリー，カテゴリーと抽象度を高め，分類した．その妥当性と確証性を確保するために，観察記録による対象者の反応を加味しながら，複数の研究関連専門家とともに繰り返し検討を行った．

### 7．倫理的配慮

対象施設の施設長に研究目的と方法，倫理的配慮に関する事項を文書および口頭で説明を行い，研究実施の承諾書を受領した．その後，対象者に研究目的と方法，研究の概要を説明し，研究に参加することは自由であり，拒否することや中断は可能であること，不利益を被らないこと，個人名や施設名が特定できないように配慮することなど，倫理的配慮に関する事項を文書および口頭で説明を行い，文書にて同意を得た．また，研究者が所属していた獨協医科大学倫理委員会で研究の承認（27005）を得て，研究を実施した．

## Ⅲ．結果

### 1．対象者の属性

研究対象者11名（特別養護老人ホーム職員の男性6名，女性3名，保育士の女性2名）は，介入開始時の平均年齢は31.8歳（標準偏差6.0）であり，専門職経験の平均月数は90.9か月（標準偏差43.0）であった．また，対象者は定期検討会，全体会議および多くの世代間交流の場に参加した．

### 2．世代間交流に対する認識

介入1年後，2年後の逐語録から，238コード，53のサブカテゴリー，24のカテゴリーが抽出された．これらを，高齢者，子ども，職員，プログラム別に分け，各表に示した（表1，2，3，4）．なお，コードは，介入1年後，2年後に分け，それらを検討した．

文中では，コードは［　］，サブカテゴリーは＜　＞，カテゴリーは【　】として表記した．また，職員全般のことを「職員」，高齢者施設の職員を「スタッフ」，

保育園職員を「保育士」として区別し，記載した.

### 1）高齢者に関する認識（表1）

高齢者に関する認識として，7サブカテゴリー，3カテゴリーが抽出された．そのうち，介入1年後のデータから抽出されたカテゴリーは，【子どもを怖れた】であった．介入1年後，2年後のデータから抽出されたカテゴリーは，【交流が楽しい時間になった】【積極的に参加するようになった】であった.

### （2）子どもに関する認識（表2）

子どもに関する認識は，13サブカテゴリー，6カテゴリーが抽出された．そのうち，介入1年後のデータから抽出されたカテゴリーは，【高齢者との交流に怯える】【高齢者との交流に戸惑う】【自分から高齢者に歩み寄れるようになる】であった．介入1年後，2年後のデータから抽出されたカテゴリーは，【交流の体験を様々な場で楽しめる】【高齢者を意識して行動するようになる】【交流を通して社会性が育まれる】であった.

### （3）職員に関する認識（表3）

職員に関する認識は，16サブカテゴリー，7カテゴリーが抽出された．そのうち，介入1年後のデータから抽出されたカテゴリーは，【子どもの変化が嬉しい】であった．介入1年後，2年後のデータから抽出されたカテゴリーは，【高齢者にもたらされた良い変化に気づく】【高齢者と子どもの良い関係がつくられていく】【職員間で子どもに関わる意識が違う】【交流に対する姿勢が変わった】【高齢者と子どもとの距離感が残る】【職員間の交流はできるが協働は難しい】であった.

### （4）プログラムに関する認識（表4）

プログラムに関する認識は，17サブカテゴリー，8カテゴリーが抽出された．そのうち，介入1年後，2年後のデータから抽出されたカテゴリーは，【交流を自由に工夫していく】【どの高齢者も子どもも交流できるように工夫したい】【子ども中心の交流でよいのだろうかと思う】【交流がマンネリ化していく】であった．介入2年後のデータから抽出されたカテゴリー

表1　高齢者に関する認識

| カテゴリー | サブカテゴリー | 1年後 | | 2年後 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 主要なコード | コード数 | 主要なコード | コード数 |
| 子どもを怖れた | 子どもを怖がっていた | 高齢者の中には結構，体，多動的に動いていたりとか興奮している子たちを最初すごく怖がっていた | 1 | | 0 |
| 交流が楽しい時間になった | 名前を呼ばれることが嬉しい | 子どもたちから名前を呼ばれると高齢者も喜んでいる<br>名前を覚えてもらっているっていう感覚が高齢者は嬉しいと思う<br>子どもたちが名前を言うとすごい笑顔になるおばあちゃんがいた | 5 | | 0 |
| | 子どもをかわいいと感じる | 子どもたちのこと好きなんだなとかっていう気持ちがすごく見られる<br>来れば可愛いねって言ってくれて笑顔になってくれるし喜んでもらえる<br>可愛い子どもたちが来たとかいって笑顔になってくれる高齢者がいる | 5 | | 0 |
| | 子どもが来るのを楽しみにする | 子どもたちが来たとか言って笑顔になってくれる高齢者がいる<br>高齢者自身も，今日は子どもは来ないのかって | 4 | 「良かったよ」,「次はいつ来るの？」と話してくれる | 2 |
| | 交流を楽しんでいる | 高齢者の楽しんで喜んで笑顔も見られている<br>普段笑わない高齢者がそのときだけ笑ってくれる<br>交流会の前までちょっとそわそわして落ち着きのなかった高齢者が交流会のあとはずっとニコニコ笑顔で楽しんでやって参加している | 7 | やるよりは見て楽しんでいる<br>手と手が触れ合うたびに笑顔になる高齢者がいる | 4 |
| 積極的に参加するようになった | 自ら交流に参加しようとする | 交流会の時だけ動けない高齢者が手を動かすことができた<br>体操のときに体を動かしている高齢者が最初に比べたら増えた<br>今から交流会だよっていうと笑顔で高齢者自ら車いす自走してフロアに向かっていく姿が見られた | 4 | できる高齢者も結構やってくれたり，声だけ出せる人は声を出してくれたりした<br>身ぶり，そぶりで体を動かしてくれる高齢者がいて，体を動かせていた | 4 |
| | 交流で自己表現をするようになる | 初めは遠慮がちだった高齢者が自らお話，自分の名前を言うようになった<br>体がうまく動かないご高齢者も頑張ってよろしくお願いしますと言ってくれた | 4 | | 0 |

表2　子どもに関する認識

| カテゴリー | サブカテゴリー | 1年後 | | 2年後 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 主要なコード | コード数 | 主要なコード | コード数 |
| 高齢者との交流に怯える | 見知らぬ高齢者との交流に怯える | 交流することに最初すごい怯えていた子がいた | 1 | | 0 |
| | 交流に慣れても怖さが残る | ちょっと怖がっている感じはあるがスタッフの顔を見ないでハイタッチする姿が自然になってきた | 1 | | 0 |
| 高齢者との交流に戸惑う | 高齢者との接し方がわからない | 子どもたちは最初接し慣れてないところもあった<br>ハイタッチするときに子どもたちがスタッフの顔見てハイタッチしていた | 3 | | 0 |
| | 高齢者との距離感が分からない | 子どもたち最初はやはり距離感が掴めなかった | 1 | | 0 |
| 自分から高齢者に歩み寄れるようになる | 自分から高齢者と関わろうとする | 最近は結構自分たちから声をかけたりとか話しして楽しむ姿が多く見られる<br>以前に比べるとやっぱり距離感が近づいたのもあって子どもたちがすごく高齢者に話をかけていた<br>子どもたちの中でもお話ししてくれる高齢者とかのやっぱり存在が嬉しいのか近寄っている<br>少しずつ，自分からハイタッチしにいったりとか話かけたりしている | 6 | | 0 |
| | 知らない高齢者とも交流できる | 自分と触れ合ってない高齢者とでも全然普通に隣にスッて並んでできた<br>触れ合う機会が増えて，なんの抵抗もなく誰のところでも行けるようになっている | 3 | | 0 |
| 交流の体験を様々な場で楽しめる | 交流の場で楽しんでいる | 子どもたちもやっぱり一緒にいて楽しいとか話してみたいっていう多分思いがある<br>高齢者からよろしくお願いしますとか反応が返ってくるとやっぱり嬉しいみたい<br>ゲームなどを取り入れてくれるようになって，すごく子どもたちも行くのが楽しみになっている | 6 | | 0 |
| | 交流以外の場でも楽しんでいる | 帰ってきてから他のフロアの子たちに今日はなんとかやったんだとかっていう話している姿があった | 1 | 高齢者をよく見ているから，高齢者のごっこ遊びみたいなことができる<br>おうちで交流会に誰々が今日はいなかったんだと，具体的内容を話し楽しんでいるようだ<br>交流会の様子を1日の一コマで自由画帳に描き，思い出している | 4 |
| 高齢者を意識して行動するようになる | 一人一人の高齢者を意識していく | 子どもの方々も高齢者の名前をもう全員参加する度に覚えてる<br>施設内で自分の階のご高齢者がいると，あれ誰だよとか子どもたち同士で言い合ったりしている<br>今日は○○さんはいないのかなとかっていう声がよく聞こえる<br>ボール遊びしてても子どもたちが高齢者の名前を呼びながらボールを送ってくれる | 9 | 子どもの子が，高齢者の名前を覚える | 2 |
| | 高齢者の状態に配慮した行動ができる | なかなか持つことが出来ない高齢者に子どもたちが物を持たせてあげていた | 1 | | 0 |
| 交流を通して社会性が育まれる | 自然にマナーやルールが身につく | 交流会以外の部分で子どもたちのルールやマナーを守るっていうことが生まれてきた<br>覚えてきたこととかが日々の中で生かされているのかなと感じる | 3 | おじいちゃん・おばあちゃんとの関わりが少ないので，いたわる気持ちとか子どもなりに学んでいる | 2 |
| | 上手に人と関れるようになる | | 0 | 学んだことを友達の関わりなどに発展できる<br>人との触れ合いも増えたことが子どもにも刺激になった | 3 |
| | 様々な場面で対応できる力がつく | こういうときにはこうするっていうということを学んだ | 1 | 新しい場面に関する適応力が高まった | 1 |

表３　職員に関する認識

| カテゴリー | サブカテゴリー | 1年後 | | 2年後 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 主要なコード | コード数 | 主要なコード | コード数 |
| 高齢者にもたらされた良い変化に気づく | 高齢者の変化がすごく嬉しい | 高齢者の喜びが目に見えるので良かった<br>高齢者のできることが増えて，スタッフも喜んでいる | 2 | 次どんな表情が見れるか楽しみができた<br>自分から積極的に参加し活動が増えたのが良かった | 3 |
| | 高齢者の楽しみの場ができてよかった | 高齢者にとって交流会という場ができた<br>高齢者の名前を正しく呼んでもらえるのが，すごいありがたいし嬉しいなと思う | 4 | 高齢者の余暇時間が充実した<br>高齢者が子どもを見送る姿も見られたのは良かった | 2 |
| | 高齢者の可能性に気づく | 高齢者は思ったより声出る<br>高齢者が保育士にお辞儀をしてくれた<br>いつも長い時間起きてられない高齢者でも，子どもが来たのを見たり一緒に何かをしたりすることでそれに集中し，起きていられる | 4 | 声を出さなかったのが出るようになったことは自分でも良かったと思う<br>自己紹介はできないだろうと決めつけてたことが見られたりするのはやっぱりすごく刺激になった | 2 |
| 高齢者と子どもの良い関係がつくられていく | 高齢者も子どもも良い表情になっている | 最初に比べれば子どもの表情だったりとか高齢者の表情が変わってきた<br>すごく子どもも高齢者も笑顔がなんか増えた | 5 | | 0 |
| | 高齢者の名前を介して交流が深まる | 子どもが高齢者の名前を覚えてくれているので，すごくいい交流なのかなと思う | 1 | おばあちゃん誰ですか？とか声掛けると，誰々ですみたいな感じで言ってもらっている<br>名前を覚えたことで関わりが深まった | 2 |
| | 高齢者と子どもとの距離が縮まっている | 子どもと高齢者との距離がやっぱり縮まってきたのかなとすごく感じた | 1 | | 0 |
| 子どもの変化が嬉しい | 子どもが楽しみながら変化していくことが嬉しい | 子どもが楽しめている姿にすごくいいなと思いながら見ていた<br>最初すごい怯えていた子が最近自分から近寄ってくれるようになったので良かった | 3 | | 0 |
| 職員間で子どもに関わる意識が違う | スタッフは子どもに視点が行きづらい | スタッフは子どもたちの名前覚えてない<br>何度も来る子どもの変化が分からない | 2 | 子どもとのコミュニケーションあまり取れてないので，もうちょっと増やせたらと思う<br>今の子どもがどのようなものが好きなのか分からなかった | 2 |
| | 保育士は高齢者より子どもに目がいく | 保育士は子どもたちがあまり暴れないよう見ている感じ<br>保育士に高齢者のイメージは障害のある方イコールっていうちょっと偏った感じがあった<br>子どもが高齢者に話しかけ過ぎて保育士が子どもを怒ってしまうこともある | 3 | 保育士も調べて子どもに新しい手遊びを提供している | 1 |
| 交流に対する姿勢が変わった | 形に捉われて交流を楽しむ余裕はなかった | スタッフは交流当初は，次は何をやらなきゃみたいに考えていた<br>最初は教えてもらった順番通りにっていうのが頭にあって，スタッフ自身がなかなか楽しむまでいかなかった<br>最初はどういうふうにやるんだろうとか，自分がどういうふうに動いたらいいのかとか，流れとかも分からなくて不安だった | 4 | 世代間交流をする意義を考えてプログラムにこだわりすぎてしまった<br>プログラムについて，いろいろ何かやらなくてはと思ってるところを感じた | 2 |
| | 職員自身が交流を楽しむようになる | スタッフは手遊びなり昔遊び，ブンネメソッドを使って，楽しんで参加できるようになった<br>スタッフ自身が楽しめないとこの場が楽しくならないと思う<br>これから高齢者と子どもとスタッフとみんなが楽しんでいきたい<br>楽しくやることは他のスタッフも徐々にできてきていると思う | 6 | | 0 |
| | 交流を当たり前にできる | スタッフは今はもう自ら進んでいろいろなんか考えずにできている | 1 | 最近はもう交流会に慣れてきた | 2 |
| | 交流会全体を見て動く | | 0 | 高齢者と子どもの交流してる様子やどのようにコミュニケーション取っているかを見ることによって，全体を見れるようになってきた<br>もうちょっと全体をよく見て動けるようにしていきたい | 2 |
| 高齢者と子どもとの距離感が残る | 高齢者と子どもの距離感がある | 子どもたちと高齢者の距離感が見られた | 1 | 高齢者と子どもの距離感が遠い | 2 |
| 職員間の交流はできるが協働は難しい | 職員間の交流が進む | 最初よりはたまにスタッフ同士で世代間交流の話をするようになった<br>保育士と結構連絡は前よりは取るようになった | 2 | 交流によってスタッフ間の話題が広がった | 1 |
| | 協働するのは難しい | 保育士はスタッフの方に進行とかを全部任せて子どもを見ている感じ | 1 | 保育士を巻き込むっていうことはうまくいかない<br>交流は介護職の主導が多い | 2 |

表4　プログラムに関する認識

| カテゴリー | サブカテゴリー | 1年後 | | 2年後 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 主要なコード | コード数 | 主要なコード | コード数 |
| 交流を自由に工夫していく | マニュアルにこだわらない工夫をする | スタッフに聞き，やっているのを見ながら司会を進めるほうに回ることは少しずつできるようになってきた<br>考えながら工夫しながらやるように前よりもなった<br>最初の頃よりも，マニュアル通りではなく工夫するスタッフが増えてきた | 5 | | 0 |
| | 子どもが楽しめるように工夫する | 堅い感じというよりは，おばあちゃんちに遊びに来たという気を使わない感じでやっていけたらいいと思う<br>言葉のキャッチボールで，スタッフは子どもに対する言葉のかけ方とか，柔らかくというか噛み砕いて言う | 4 | アレンジした体操を取り入れて行っている | 1 |
| | 高齢者も子どもも一緒に楽しめるようにやりたい | 前回はブンネやったから今回は別なのをやってみようとスタッフは工夫している<br>最近はこれやったら楽しいかなとか，これやったら高齢者とか子どもが一緒にできる遊びになるかなと考えながらできるようなってきた<br>どのようにやれば子どもも高齢者も楽しく司会を進行できるのかがまだ分からないので，そこを見つけていきたい | 6 | 内容の見直しや少し変えられたらいいのかなと思う<br>明るいこととかできたらと思う | 2 |
| どの高齢者も子どもも交流できるように工夫したい | 高齢者と子どもとの会話を増やしたい | 交流では自己紹介を毎回やっている | 1 | 自分と子ども，自分と高齢者，高齢者と子どもの会話がもっと増えればいい<br>スタッフが子どもと話してテンションが上がると，高齢者との話がおろそかになる<br>その距離感を縮めるようなコミュニケーションの取り方と巻き込み力を養えていきたい | 5 |
| | 子どもがどの高齢者とも交流できるようにしたい | | 0 | 話せる，できる高齢者に行きたがるので，できない高齢者に目をもう少し向けられるといいと思う<br>子どもがいろんな高齢者との関わりを深められるように，場面場面に応じて工夫している | 2 |
| 子ども中心の交流でよいのだろうかと思う | 交流は子どもが中心になりがち | 子どもたち主体でやっているような感じ | 1 | 流れが完全にできあがっちゃってて，本当に子ども達の発表会みたいな感じ<br>お兄ちゃん・お姉ちゃん達とちっちゃい子がしゃべってるというので楽しんでいると思う<br>子どもが発表する時間を作って，その子どもを見て楽しむだけの時間を作っているという気はする | 4 |
| | 子どもによって交流の内容に差が出てしまう | | 0 | 楽器をやってるグループといつも手遊びしかやらないグループがある<br>2階，3階の交流内容が違うため，子どもたちが納得しないことがある<br>交流に差ができてしまうのはどうかなとは思っている | 5 |
| 交流がマンネリ化していく | 同じような交流になっていく | 結構同じ子どもたちがくる | 1 | なんでもないことでもやっていくとマンネリ化する<br>決まった流れができてしまって子どももちょっと飽きてきた<br>時間の活用に妥協している<br>同じ手遊びを高齢者の方に紹介するとちょっと飽きてしまう | 9 |
| | 子どもは同じような体操に飽きてしまう | | 0 | 子どもがラジオ体操に飽きちゃってるのかなという感じ<br>体操も最初の頃マンネリ化していて，同じようなことしかしてなかった<br>ラジオ体操自体は，まあ慣れてきてるのかなという感じ | 8 |
| | 高齢者にとってマンネリ化は悪くない | | 0 | マンネリ化するとお年寄りにとっては楽で，この体操は私できるのよっていう得意気な感じがある | 2 |
| 高齢者に寄り添う交流を考える | 高齢者がやりたくなる交流にしたい | | 0 | （体を動かすことにこだわらず）視覚から入るのもありなのかなと思う<br>高齢者に今日は何がしたいですかみたいな感じで聞きながら，進めれたらと思う<br>最後のタッチだけではなくて，交流の中で思うように動けない人達も主役になれるような，何かがあればいいと思う | 5 |
| | 高齢者にとって難しい内容になってしまう | | 0 | 高齢者にやってもらうのはちょっと難しい<br>結構楽器ができないから参加できなと言う人もいる | 5 |
| お互いのペースで一緒にいる時間があればいい | 一緒に1つのことをできる時間があればいい | | 0 | プログラムにこだわらず，その時間を一緒に共有してるところを大切にしてもらう<br>今の交流のかたちにこだわらずその時間を楽しむところに移っていく時期ではないかと感じた<br>職員が入って何か一緒に触ったりとか持ったりすれば，手は触れ合う機会は少なからず増えるのかなと思う | 9 |
| | お互いのペースを見ながら調整する | | 0 | 高齢者とスタッフ，高齢者と子どもがペースが合うようにやっている<br>子どもに教えてもらいながら職員がやって，できないところを高齢者に楽しんでもらうようなことができればいい | 3 |
| より交流できる環境を工夫したい | 触れ合いの会場を工夫したい | | 0 | 見て楽しむというよりは一緒に楽しむ環境をもっと作っていけたらと思う<br>交流の場所を決めずに，高齢者が子どもがいるほうに行くなどアプローチが必要になると思う | 2 |
| | 交流する空間の工夫をしたい | | 0 | 物理的に狭くするのは距離感が縮み，触れ合いたくなくても勝手に触れ合う状況が作られると思う | 3 |
| 交流の場でしかできないことをしたい | 保育園ではできない遊びで高齢者と交流したい | | 0 | 保育園ではできない伝承遊びとかそういうのを教えてほしい<br>伝承遊びを一つでも取り入れて，もっと子どもも楽しめものもあって良いのではないかと思う | 4 |

は，【高齢者に寄り添う交流を考える】【お互いのペースで一緒にいる時間があればいい】【より交流できる環境を工夫したい】【交流の場でしかできないことをしたい】であった．

## Ⅳ．考察

高齢者，子ども，職員，プログラムへの認識について，介入１年後，２年後の変化を検討し，それぞれを考察する．

### １．高齢者に関する認識

職員は，カテゴリーが示す通り高齢者に，「楽しみ」「かわいい」「嬉しい」といった感情面にプラスの影響があったことを認識していた．さらに積極的に「話す」「動く」という動作面もプラスの影響を認識していた．介入２年後でも同様に感情面や行動面への刺激効果が示された．これらの結果から，高齢者にとっての世代間交流は，楽しみを通して，心身の活性化，役割が持てる，さらには持続的な交流によって関係性が構築できるなど，プラスの影響が大きいと職員は認識していた．世代間交流は，子ども，青年，中・高年がお互いに持っている能力や技術を出し合って，一人ひとりが活動の主役となることと定義される[20]ように，自己成長，役割の獲得，存在感，活性化など高齢者自身が持つ能力や技術を発揮する場となる．また，高齢者にとっての世代間交流の利点は，高齢者の社会的孤立，高齢者の能力，英知，経験の社会的活用などであり[20]，継続的な世代間交流を行うことが，高齢者の自己効力感の維持・向上の場となっていると考える．一方，【子どもを怖れた】のカテゴリーが示すように，素早い子どもの動きに高齢者は怖れを感じていた．しかし，それは［興奮している子たちを最初すごく怖がっていた］が示すように交流の初めの頃の様子であり，その後は［普段笑わない高齢者がそのときだけ笑ってくれる］というように，楽しむ様子のコードが多く抽出されている．適応能力には健康，感覚機能，認知能力などが関連することから[21]，入居している高齢者にとって，子どもが生活の場に入るという環境の変化に適応するには時間を要すると考えられる．継続的に世代間交流が実施されることで，時間をかけて高齢者の適応が促され，その結果として［高齢者自身も，今日は子どもは来ないのかって］と発言するように，交流を怖れではなく日常として受け止めることができたのではないかと考える．

### ２．子どもに関する認識

介入１年後のデータから，職員は，【高齢者との交流に怯える】子どもの様子を捉え，世代間交流を怖がる，怖れる思いが最初あるいはその後まで残ったと認識していた．子どもは外見で人を判断し，恐怖心を感じる[22]．突然大きな声を出して怒り始めたりする高齢者がいると子どもは高齢者に対してマイナスイメージをもつとの報告もある[23]．しかし，１年間の交流継続によって，子どもは【高齢者との交流に戸惑う】から【自分から高齢者に歩み寄れるようになる】に変化していった．富田[24]は，幼児期の子どもの恐怖対象は，最初，大きな音や騒がしい音，見知らぬ物・人・場所，高い所，急に動かされること，痛みなどであるが，知識や経験の増大に伴って怖がらなくなると述べている．特に，高齢者との接点が少ない子どもにとって，高齢者を知ること，継続的に触れ合う経験が恐れの軽減に効果的であったと考える．また，１年目は＜交流の場で楽しんでいる＞ことが中心であったが，2年目には高齢者になりきったごっこ遊びを，保育園や家庭といった＜交流以外の場でも楽しんでいる＞様子がみられるようになっていった．ごっこ遊びは，１から２歳ごろから始まるが，年齢に従い複雑化していく．幼児期の子どもは，親の元を離れて過ごす時間が増え，世界に対して強い興味をもつようになる時期である．幼児期のごっこ遊びは，身近な生活のいろいろな場面における物事や人の行動を真似て，いろいろな役になって遊びながら自分とは異なる立場に立つことで，いつもの自分とは異なる感情を味わうこともできる[25]．交流が契機となったごっこ遊びは，高齢者の立場に立ち，高齢者をはじめとする他者への思いやりや社会性を身に着け，子どもがより成長できる場として捉えることができ，交流は子どもの成長に良い効果をもたらしたと考える．さらに，子どもは「おじいちゃん，おばちゃん」の集団と捉えているのではなく，＜高齢者の一人一人を意識＞し，高齢者の名前を覚え，それぞれの心身機能に配慮して対応するなど＜高齢者の状態に配慮した行動ができる＞ようになり，さらに個人として認識し関係性を構築していた．交流開始当初，子どもたちにみられた高齢者に対する怖れは，偏見と捉えることが出来る．偏見とは対象に対す否定的態度を指し，対象集団に否定的内容の信念や感情，行為意図を含んでいる[26]．幼少期に両親や周囲の

大人たちから，あるいは様々なメディアを通じて植え付けられた特定の対象に対する否定的な感情としての偏見はきわめて頑強である[27]．オルポート[28]は，偏見は相手に対する知識の欠如が大きな原因であると考え，接触する機会が増え，真の情報に触れればおのずと解消すると述べている．子どもは，高齢者とふれあい，職員をはじめとする大人の様子を見て，継続的な交流の中で高齢者に対するイメージを変化させ，新たな関係性を構築することが出来たと考える．さらに，保育園内の同世代との交流では得難い知識や経験が，他者や社会を意識した行動が，【交流を通して社会性が育まれる】ことにつながったと考える．

## ３．職員に関する認識

職員は，世代間交流による高齢者や子どもの変化に喜びを感じながらも，交流に慣れていない職員にとっては，交流運営に負担感と義務感があった．研修で世代間交流の基礎知識を学び，交流がもたらすよい効果を期待していたが，職員自身は＜形に捉われて交流を楽しむ余裕はなかった＞．初めは，交流の前例が少ないことから交流モデルが見いだせず，不安や悩みを抱えるなか，研修で例示したものをマニュアルと捉え，その通りに何とか準備をしていた状況であったと推測される．人は初めてのことに不安を抱く．その不安に対しては，不安に対する理解や対処法に加え，不安を乗り越えることでどのような目標やゴールを達成したいのかを考えることが必要である[29]．職員自身が，「交流が高齢者の心身の活性化や子どもの成長につながる」などの良い変化を目標とし，検討会や会議などを通して【高齢者にもたらされた良い変化に気づく】【高齢者と子どもの良い関係がつくられていく】【子どもの変化が嬉しい】といったことを感じることで，交流に関する不安が解消されていったのではないかと考える．

本研究では，高齢者をよく知っているはずのスタッフが，［自己紹介はできないだろうと決めつけてたことが見られたりするのはやっぱりすごく刺激になった］というように，子どもたちがもたらす高齢者の変化や，普段見られない高齢者の様子から＜高齢者の可能性に気づく＞ことで，介護者にとっても高齢者への介護を再考する場となっていた．高齢者のQOL向上を肌で感じ，それが交流に関する不安解消となり，さらなる交流の継続意欲につながったのだと考える．一方で，スタッフは子どもへの関わりに戸惑っていた．最初スタッフは，子どもに気を配る余裕もなく，＜形に捉われて交流を楽しむ余裕はなかった＞＜スタッフは子どもに視点が行きづらい＞が示すように，型通りの交流となり，２年目になっても［今の子どもがどのようなものが好きなのか分からなかった］と語られていた．先行研究においても，施設における高齢者と子どもの交流の課題の一つとして，職員における子どもの特性についての理解が挙げられており[30]，高齢者介護を専門とする者にとって子どもを理解することに困難が伴う．世代間交流には，高齢者と子ども，両者の理解が重要となる．本研究における研修内容の多くは，高齢者への関わり方が中心となり，子どもに焦点化したものは少なかったことからも，子どもを理解できる研修内容を検討することが必要であることが示唆された．一方で，職員自身は交流に対して，＜職員自身が交流を楽しむようになる＞＜交流を当たり前にできる＞＜交流会全体を見て動く＞といった主体的な姿勢に変化していったことが示された．導入時の研修は重要であるが，その後に交流での出来事を話し合い，助言するなどの継続的支援が効果的であったと考えられる．

また，当初＜保育士は高齢者より子どもに目がいく＞というように，保育士は交流に積極的に参加できていなかったと推察された．しかし，【子どもの変化が嬉しい】と感じるようになり，子どもの変化を通して交流の意義を見出し，２年後には［保育士も調べて子どもに新しい手遊びを提供している］というように，楽しんで参加できるようになっていった．川出ら[31]が，保育士が高齢者を普通に受け入れられると，子どもも普通に対応し，やさしさを示していたと報告したように，周囲の大人の行動は子どもと高齢者の関係性に影響を与える．保育士をはじめ周りの大人が「高齢者を普通に受け入れられる」という姿勢や態度を子どもに示すことが重要であり，そのためには，高齢者をきちんと理解することが基本である．本研究における標準化した継続的世代間交流プログラム研修では，高齢者・子どもの特徴・関わり方の具体的な技術や注意点について実践例を紹介しながら伝える内容となっており，保育士をはじめとする職員の高齢者理解を促し，それが子どもに良い影響を与えた可能性がある．

一方，２年後になっても【高齢者と子どもとの距離感が残る】【職員間の交流はできるが協働は難しい】ことが語られ，交流運営やプログラムにさらなる課題が認識されていた．

## 4．プログラムに関する認識

プログラムに関して，1年目に多く語られていたことは，＜マニュアルにこだわらない工夫をする＞＜子どもが楽しめるように工夫する＞＜高齢者も子どもも一緒に楽しめるようにやりたい＞といった，脱マニュアルの模索，参加する全員が楽しめるプログラムの工夫など【交流を自由に工夫する】ようになった．それは，「交流が高齢者の心身の活性化や子どもの成長につながる」という目標に向かい，努力している姿勢が反映されていたと考える．しかし，2年目になると，前述のように，様々な状況・課題が見出され，認識が変化していった．【どの高齢者も子どもも交流できるように工夫したい】では，検討会や会議での話し合いから，世代間交流の定義である「一人ひとりが活動の主役となる」ことが出来ているのだろうか，対象者一人ひとりのためにさらによい交流をしたいという思いが強まった結果と考える．特別養護老人ホームの入居者は要介護状態であるが，心身の状況はそれぞれ違う．［話せる，できる高齢者に行きたがるので，できない高齢者に目をもう少し向けられるといいと思う］が示すように，すべての高齢者が交流あるいは参加できてはいないという認識であった．子どもは交流によって，自分がいることを喜んでもらえたり，自分が役にたつ人間であることが実感できる，高齢者の包容力によって幼児がありのままを受け入れてもらえていると感じている[31]．子どもが，それらを得ることが難しい高齢者には自ら関わろうとしないのは当然のことである．このような試行錯誤から，1年目は，高齢者と子どもが一緒にできる交流内容・方法を工夫していたが，2年目には＜お互いのペースで一緒にいる時間があればいい＞と考え方が変化していったと考える．交流での様々な経験から，職員が【子ども中心の交流でよいのだろうかと思う】【交流がマンネリ化していく】と感じたように，「世代間交流プログラムは，離れた世代同士の交流を意図的かつ継続的に仕掛けるのが特徴」[4]であり，交流を続ける中で，意図的・継続的に介入することの重要性に気づいていった．高齢者や子どもが楽しめる交流でなくては，その継続は難しい．【高齢者に寄り添う交流を考える】が示すように，高齢者の生きがいにつながるように，何が楽しいのか，何ができるのか，難しくはないのかなど，プログラムの内容を再考するようになった．また，何か一つできる時間の共有や一緒にいる場の共有など，【お互いのペースで一緒にいる時間があればいい】【より交流できる環境を工夫したい】という考え方が芽生え，参加者全員一緒に，一斉にプログラムをやらなくてもよいという認識になっていった．立松[32]は，心身の症状が重度で自由に行動することが難しい高齢者であっても，高齢者が気持ちを癒されたり，仲間意識を持てたりする対象を身近に作り，世話や観察することが「役割を持つ」ことになると述べている．つまり，その対象が世代間交流の子どもであれば，動くことが難しい高齢者は子どもと過ごすことだけでも，交流の場で役割を担うことが出来る．プログラム内容を一緒に実施することではなく，そこにいることが世代間交流への参加のひとつの形であると捉えることが出来れば，一人ひとりが活動の主役になる交流に一歩近づくのではないかと考える．

最後に，2年後に語られた【交流の場でしかできないことをしたい】は，保育士自身が子どもの成長を肌で感じ，子どもだけではなく保育士自身も高齢者との関係性が深まるに従い，交流の意義を理解していった結果と考える．世代間交流に携わるほとんどの保育士が，初め高齢者について怖さや壁を感じていたという報告もあり[31]，本研究では保育士に研修プログラムを通して高齢者の理解を深める機会を持った．しかし，交流の場が高齢者施設であったことも影響し，スタッフと比較して保育士は高齢者との触れ合いが少なく，参加に消極的となった可能性がある．これらのことから，本研究の研修受講だけでは高齢者への偏見や交流への不安などは解消できないと考えられ，交流の場を交互にするなどの工夫があれば，保育士が消極的という結果にならなかった可能性がある．継続的支援を背景に，［高齢者が保育士にお辞儀をした］などの高齢者の実際の言動や［触れ合う機会が増えて，なんの抵抗もなく誰のところでも行けるようになっている］などといった子どもの姿を検討会や会議で報告・共有することにより意識化でき，安心して交流に参加できるようになったと考える．保育士から，高齢者からしか得られないものを得たいと活動への意欲を見せるようになったのも，検討会等での肯定的な評価によってさらに効果的な交流にしたいと認識が変化したからと考える．

以上のことから，世代間交流プログラム研修および継続支援といった介入を受けた職員は，高齢者や子どもへの良い効果を実感することによって，義務感を伴う形式的な交流から，交流の本来の目的に根差したより自由な交流を工夫したいという認識に変化していっ

たことが明らかとなった．また，スタッフ・保育士双方が高齢者・子どもを理解するために，講義及びDVD視聴からなる研修は必要なものであったが，主体的に関わるという認識の変化には，職員間の話し合いの場を設け，研究者から助言するといった継続的支援が影響していたことが示唆された．そして，2年間の介入後も，職員間の協働が難しいと認識されており，全体会議の頻度や方法を工夫するなど，その対処が今後の課題であった．

本研究は，幼老共生施設一か所の職員を対象としており，多様な施設の状況，高齢者の心身の状態，子どもの環境等があることから，全ての施設及び職員の状況を反映している結果ではない．今後は，さらに対象地域を広げ，対象人数を増やし，継続的世代間交流プログラム介入がもたらす影響を検証していく必要がある．

【謝　辞】

本研究にご協力くださいました施設長様を始め職員の皆様，また入居者，園児とその保護者の皆様に深く感謝申し上げます．なお本研究は，2015～2017年度科学研究費基盤C（課題番号15K11777）の助成を受けて実施した．

【利益相反】

開示すべき利益相反はない．

【文献】

1）高齢社会福祉ビジョン懇談会：21世紀福祉ビジョン～少子・高齢社会に向けて～（平成6年3月28日）．https://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/syakaifukushi/489.pdf（2022.2.1閲覧）
2）厚生労働省：誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現―新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン―（平成27年9月17日）．https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/bijon.pdf（2022.2.1閲覧）
3）厚生労働省：2019年国民生活基礎調査の概況．https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/index.html（2022.2.1閲覧）
4）黒岩亮子：日本における世代間交流の展開．社会福祉．59：85-95，2018
5）Generations United：INTERGENERATIONAL PROGRAMS BENEFIT EVERYONE．https://www.gu.org/resources/fact-sheet-intergenerational-programs-benefit-everyone/（2022.2.1閲覧）
6）草野篤子：インタージェネレーションの必要性．草野篤子，秋山博介：現代のエスプリno.444．東京：至文堂；61，2004
7）Nancy Z. Henkin，Taryn Patterson，Robyn Stone et al.: Intergenerational Programming in Senior Housing: From Promise to Practice. Generations United；2-27, 2017 https://www.gu.org/resources/intergenerational-programming-in-senior-housing-from-promise-to-practice/（2022.2.1閲覧）
8）吉津晶子，溝邊和成：世代間交流の教育的意義に関する研究の動向と課題．海外事情研究．44（1・2）：109-127，2017
9）多湖光宗：幼老統合ケア．幼老統合ケア研究会．名古屋：黎明書房；53，2006
10）多湖光宗：前掲書；59
11）多湖光宗：前掲書；119
12）多湖光宗：前掲書；121
13）多湖光宗：前掲書；123
14）多湖光宗：前掲書；46
15）碇浩一：幼老共生社会の提案―子どもの豊かな人間環境（交齢社会）を目指す―．日本生活体験学習学会誌．2：25-33，2002
16）藤原佳典：世代間交流における実践的研究の現状と課題―老年学研究の視座から―．日本世代間交流学会誌．2（1）：3-8，2012
17）六角僚子，種市ひろみ：幼老共生施設における継続的世代間交流プログラム介入における効果．三重県立看護大学紀要．24：13-18，2020
18）角マリ子，木下陽子，福永寛恵：高齢者と子どもの世代間交流に関する文献検討．熊本保健科学大学研究誌．16：79-93，2019
19）土永典明，岡崎利治：世代間交流に関する調査研究高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から．九州保健福祉大学研究紀要．6：27-34，2005
20）草野篤子：前掲書；5-8
21）佐々木心彩，羽生和紀，長嶋紀一：高齢者の施設適応度測定指標の開発―痴呆の程度と居室の個人化からの検討―．老年社会科学．26（3）：289-295，2004
22）下村美保，下村一彦：少子高齢社会における世代間交流の意義と課題：その2 幼老合築型施設‘みどの福祉会’のアンケート調査を通して．山形短期大学紀要．41：179-193，2009
23）土井晶子，前徳明子：高齢者施設におけるレクリエー

ション活動の一環としての高齢者と子どもの世代間交流の効果とその可能性についての考察．研究紀要．3：25-42，2009
24）富田昌平：幼児期における恐怖対象の発達的変化．三重大学教育学部研究紀要．68：129-136，2017
25）厚生労働省：保育所保育指針解説　平成30年2月．https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf（2022.2.1閲覧）
26）池上知子：差別・偏見研究の変遷と新たな展開．教育心理学年報．53：133-146，2014
27）Crandall, C. S., Eshleman, A.: A justification-suppression model of the expression and experience of prejudice. Psychological Bulletin. 129（3）：414-446，2003
28）G.W.オルポート，原谷達夫，野村昭共訳：偏見の心理．東京：培風館；243-284，1968
29）吉村晋平：心理学に基づく“不安”との付き合い方．追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要．14：9-15，2017
30）林谷啓美，本庄美香：高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方．園田学園女子大学論文集．46：69-87，2012
31）川出富貴子，鍵小野美和：子どもと老人ふれあいに場面創出過程における老人に対する保育士の思いの変容と園児の反応および変容要因．愛知医科大学看護学部紀要．2：23-30，2003
32）立松麻衣子：高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策―高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究―．日本家政学会誌．59（7）：503-515，2008

受付日：2021年12月17日　受諾日：2022年2月18日

【Practice Report】

# Changes in the perception of staff caused by standardized continuous practice of intergenerational exchange programs in complex facilities for children and older adults: Interviewing staff one-and-two years after the initial training

Hiromi TANEICHI　Ryoko ROKKAKU　Yukari SEKI　Sachiko HAYASHI

## Abstract

This study aimed to clarify the changes in the perception of the staff caused by the continuous practice of intergenerational exchange programs in complex facilities for children and older adults. Staff members who worked at a nursing home and nursery school located in the same premise received specialized training via standardized intergenerational programs. Focus group interviews were conducted with 11 staff members at their work facilities one-and-two years after the initial training. This research discussed that their perception changed from understanding that these programs were compulsory and conventional to perceiving the direct benefits on both older adults and children. These experiences encouraged them to think outside the box, look forward to improving the program, and act unrestricted from the original program. The standardized intergenerational programs included lectures and visual contents, followed by continuous support that allowed participants to be heard and receive advice that encouraged them to act on their own initiative. At the end of the second year challenges, collaboration among the staff was perceived. Understanding these difficulties will be the next step in this research.

Key words：Intergenerational program, complex facilities for children and older adults, focus group interview, staff, perception

Faculty of Human care at Makuhari, Department of Nursing, Tohto University
E-mail: hiromi.taneichi@tohto.ac.jp